

# 明代初期の八股文について (8)

The Eight-legged Essay in the early Ming Dynasty (8)

滝野 邦雄  
Takino, Kunio

## (五) 天順年間

### 李東陽

李東陽（字は賓之，号は西涯，諡は文正。湖南茶陵の人。正統十二年〔一四四七〕～正徳十一年〔一五一六〕。天順八年〔一四六四〕甲申科<sup>(1)</sup>の二甲一名の進士）。『明史』によると，李東陽は四歳で徑尺（直径一尺）の書を作り，時の皇帝の景泰帝に嘉せられ，膝の上で抱かれて，果鈔を賜ったという。天順八年〔一四六四〕に数え年十八で二甲一名の進士となる。庶吉士に選ばれ，編修を授けられる。侍講學士に昇進して東宮講官に充てられる。弘治四年（一四九一），左庶吉士兼侍講學士から太常少卿兼侍講學士に進む。そして，禮部右侍郎兼侍讀學士に擢せられて，内閣に入って詔勅を典す。弘治八年（一四九五）には，官職はそのまま文淵閣に直し，機務に参与することになる。しばらくして，太子少保・禮部尚書兼文淵閣大學士に進めらる。正徳帝が即位して，少傅兼太子太傅を加えられる。宦官の劉瑾が司禮監を司り権力を振るうようになると，劉健・謝遷とともに正徳元年（一五〇六）に辭職願を出す，李東陽のみ認められず，そのまま留任する（正徳七年〔一五一二〕致仕）。これを『四庫全書總目提要』で四庫館臣は，「〔李〕東陽 劉瑾に依阿し，人品事業 均しく深く論ずるに足る無し」（『四庫全書總目提要』卷一百七十・集部二十三・別集類二十三・「懷徳堂集一百卷」条）と批判する。しかし，欽定『明史』では，次のようにいう。

〔李東陽は〕初め，〔劉〕健・〔謝〕遷と持議（主張）し，〔劉〕瑾を誅せん

と欲し、詞 甚だ厲し。惟だ〔李〕東陽のみ少しく緩やかなり。故に獨り留まる。〔劉〕健・〔謝〕遷 行くに瀕<sup>のぞ</sup>み、〔李〕東陽 祖餞（送別會）し泣き下る。〔劉〕健 正色（厳しい顔つき）にして曰く、何ぞ泣くを爲さん。使し當日力爭すれば、我らが輩と同じく去らん、と。〔李〕東陽 默然たり（欽定『明史』卷一百八十一・列傳第六十九・李東陽）。

後に劉瑾が専制を行なっていたとき、「其の間を彌縫し、亦た補救する所多し」（欽定『明史』李東陽傳）であつたという。さらに、迫害された人たちを密かに援助した。ただし、多くに人たちを救ったのに非難されたという。

劉健・謝遷・劉大夏・楊一清及び平江伯の陳熊などの輩 幾んど危禍あ

✓（1）もともとこの科は、天順七年（一四六三）癸未に行なわれた。しかし、試験場の火災により、會試を八月に、廷試を翌年の三月に行なう。そのため、天順八年〔一四六四〕甲申科の進士となっている。『貢舉考畧』に、次のように言う。

天順七年（一四六三）會試。中式するは二百四十七名。試するの日、場屋 火あり。主考の侍郎の陳文・修撰の柯潛等は皆な牆を越えて免がる。舉子の死する者は、九十餘人なり。俱に進士を賜う。〔この火災のため〕期を八月の會試に改め、明年三月を以て廷試とす。時に憲宗（成化帝）已に卽位す。故に甲申の進士有り……（道光五年〔一八二五〕重鐫『貢舉考畧』明貢舉考畧・卷一・十七葉・「〔天順七年〕癸未科」条）。また、同治九年（一八七〇）彫の『試場異聞錄』に、『鯉湖偶筆』を引用して次のような逸話を伝える。

廣信（江西）の舉人の呉野は、幼きより一つの硯を寶愛し、姓名を上<sup>うへ</sup>に鐫る。天順癸未科の會試に場屋 災あり。〔呉〕野 硯を持して鐘下に斃る。火の後、硯を以て故に〔呉〕野<sup>なん</sup>を知る。詔もて諸もろの燼骨を葬りて、石を塚上に刻して曰く、天下の英才の呉野等の墓、と。是より先、陝西に雷澤<sup>なづか</sup>なる者有り。夜に女子に途に遇う。引きて一所に至り、一つの紅の榜を見るも〔雷〕澤の名賀無し。之を問う。曰く、久しく自ら第一名は乃ち呉野なるを知る、と。又た一榜を指して〔雷〕澤に示して曰く、君と〔江西〕貴溪の鄭節とは名を聯ぬ、と。女 遂に去る。後、禮闈 災あり。〔鄭〕節 牆に循いて走げんとし、三たび躍するも、踰ゆる能わず。〔雷〕澤に遇うに曰く、爾 何人なり、と。對えて曰く、貴溪の鄭節なり、と。曰く、是れ我が同年なり、と。援けて與俱に上る。後、果たして〔八月に再試験となった天順八年〔一四六四〕甲申科に〕名を聯ぬ①。乃ち其の詳を道<sup>みち</sup>えば、則ち火榜の狀元の説、信に前に定まれり（同治九年（一八七〇）彫『試場異聞錄』第五冊・前明卷上・十九葉・「天順七年癸未科會試」条）。

①雷澤（山西定襄の人）は天順八年〔一四六四〕甲申科の二甲六十名の進士。同じく、鄭節（江西貴溪の人）も天順八年〔一四六四〕甲申科の三甲一百六四名の進士。

らんとするに、皆な〔李〕東陽に頼りて解（めんぜ）らる。其の潛移默奪（知らず知らずのうちに感化する）し、善類を保全し、天下 陰かに其の庇を受く、而るに氣節の士 多く之を非<sup>そし</sup>る。侍郎の羅玘 上書して其の早に退くを勧め、門生の籍を削らんことを請うに至る。〔李〕東陽 書を得て、俛首（うなだれる）して長歎するのみ（欽定『明史』卷一百八十一・列傳第六十九・李東陽）。

晩年にしばしば辞職願を提出するが認められず、正徳七年〔一五一二〕十六歳になって認められ、その四年後の正徳十一年〔一五一六〕に七十歳で亡くなる。

「其の文章は則ち明代一大宗と爲す」（『四庫全書總目提要』卷一百七十・集部二十三・別集類二十三・「懷徳堂集一百卷」条）といわれるように、明代を代表する文学者であった。

文を爲るや典雅流麗にして、朝廷の大なる著作は多く其の〔李東陽の〕手に出づ。篆隸の書に工にして、碑版（碑文）。篇翰（詩文） 四裔に流播す。後進を奨成し、才彦（才子賢人）を推挽（薦舉）す。學士大夫の其の門に出る者、悉く燦然として成就する有り。明 興りてより以來、宰臣の文章を以て縉紳に領袖たる者は、楊士奇の後、〔李〕東陽のみ。朝に立つこと五十年、清節<sup>か</sup> 渝<sup>か</sup>わらず（欽定『明史』卷一百八十一・列傳第六十九・李東陽）。

愈長城は次のように評価する。

去就の節は古人の重んずる所にして、有濟を期す。君子 之を諒とす。茶陵（李東陽）の武宗（正徳帝）に相となるは、以て觀る可し。夫れ逆瑾（劉瑾） 事を用い、康陵（正徳帝） 尸位（その地位にあるものの何もしない）にして、輔臣 皆な引退す。而して茶陵（李東陽） 獨り留まれり。同官の面斥（批判）・士子の口碑（非難）に至りては、能く茶陵（李東陽）の地（立場）を〔弁護することを〕爲す者無く、茶陵（李東陽）は即ち大臣の節無しとす。而れども宦成（高官に登りつめる）すれば、身 退き、何

ぞ雞肋（ちっぽけな身体）を棲遲（休む）するに至らんや。特に君側に人無く、匡救（事態を收拾する）を爲すもの莫し。善類（善良な人物）既に盡き、保全を爲す莫し。委蛇（しずしず）として曲折し、以て其の變を観るに固より必ずしも悻悻（失意）を以て鳴高（清廉であると公言する）せざるなり。璫（宦官）の惡 既に盈つれば、功臣 正に反り、日月復旦（再び朝になる）し、雨雪 華に消ゆ。『易』に云う「君子 夬たり。[獨り行きて雨に遇う] 濡るるが若く慍らること有り。終に以て咎なし」（夬卦・九三爻辭）と。豈に茶陵（李東陽）の謂に非ざるか。茶陵（李東陽）〔天順・成化・弘治・正徳の〕四朝を歴任し、屢しば、衡文（試験官）に任ぜられ、起袁（蘇軾「潮州韓文公廟碑」にもとづき、文運を再興するの意）の功有り。而れども或いは其の節を病む。之を要するに茶陵（李東陽）は亦た濁世の長者なるや（俞長城「題李西涯稿」『可儀堂一百二十名家制義』卷之三・四十四葉～四十五葉・「李西涯稿」条）。

やはり、俞長城も李東陽の八股文を評価するよりも、その出處進退を問題としている。

拙稿では、楊廷樞（字は維斗。長州の人。萬曆二十三年〔一五九五〕～永曆元年〔一六四七〕。崇禎三年〔一六三〇〕郷試第一）が、

文 此に至りて一字の費力（労力を費やす）も無し。大力（たいへんな力量）有る者に非ざれば、能わざるなり（俞長城『可儀堂一百二十名家制義』卷之三・六十一葉・「李西涯稿・由堯舜至 三節」条所引）。

と評する李東陽の八股文を検討してみたい。題目は、『孟子』盡心下の、太字でしめした三節である。

孟子曰、由堯・舜至於湯、五百有餘歳。若禹・皐陶、則見而知之、若湯、則聞而知之〔朱注①〕。由湯至於文王、五百有餘歳。若伊尹・萊朱、則見而知之、若文王、則聞而知之〔朱注②〕。由文王至於孔子、五百有餘歳。若太公望・散宜生、則見而知之、若孔子、則聞而知之〔朱注③〕。由孔子而來、至於今、百有餘歳。去聖人之世、若此其未遠也。近聖人之居、若此

其甚也。然而無有乎爾，則亦無有乎爾。

①〔朱注〕趙氏曰，五百歳而聖人出，天道之常。然亦有遲速，不能正五百年。故言有餘也。尹氏曰，知，謂知其道也。<sup>(2)</sup>

②〔朱注〕趙氏曰，萊朱，湯賢臣。或曰，卽仲虺也。爲湯左相。<sup>(3)</sup>

③〔朱注〕散，素宣反。○散，氏。宜生，名。文王賢臣也。子貢曰，文・武之道，未墜於地，在人。賢者識其大者，不賢者知識其小者。莫不有文・武之道焉。夫子焉不學。此所謂聞而知之也。<sup>(4)</sup>

聖人之生有常期<sup>①</sup>，或傳其道於同時，或傳其道於異世，

蓋聖人之生，卽道之所在也，非見之者之在當時，聞之者之在後世，則斯道也，孰從而傳之哉，

孟子於此而歷叙之，意有在矣，蓋嘗論之，道之在天下，必待聖人而後傳，然其生也不數<sup>②</sup>，故率以五百年而一見，

堯舜者道之所由以傳者也，

(2)『四書大全』孟子大全・卷之十四・盡心下・「孟子曰，由堯・舜至於湯，五百有餘歳。若禹・皐陶，則見而知之，若湯，則聞而知之」朱注の「尹氏曰，知，謂知其道也」条に，元・胡炳文（字は仲虎，号は雲峰。安徽婺源の人）の『四書通』（孟子通・卷十四）の説を引いて次のようにいう。

〔雲峰胡氏曰〕『論語』・『孟』〔子〕 未だ皆な堯・舜以來の相傳の意を言わず。但だ『論語』は行言を以て故に其の政事の實を歷述す。『孟子』は知言を以て故に其の見聞の眞を歷叙す。堯 執中（『書經』大禹謨「惟精惟一，允執厥中」）を言うは，中の用なり。湯 降衷（『書經』湯誥「惟皇上帝，降衷于下民」）を言うは，中の體なり。舜 心の上より「執中」の蘊を説き出だし，六經の心を言うは此に始まる。湯 性の上より「降衷」の初を推原し，六經の性を言うは此に始まる。此れ堯・舜・湯の道を明らかにする處を見る可し。「見て之を知る」が若きに至れば，禹・皐〔陶〕を言いて，稷・契を言わざるは，何ぞや。或いは曰く，禹・皐〔陶〕を挙げ，或いは其の餘を例とす，と。然らば之を『書〔經〕』の稷・契には「謨」と曰わず，禹・皐〔陶〕には獨り「謨」と曰う。蓋し見る可きなり。況や「洪範九疇」は禹 之を發し，「天叙」・「天秩」・「五典」・「五禮」（皐陶謨）は，皐〔陶〕 之を發し，其の道を明らかにする功 固より小なからざるをや（『四書大全』孟子大全・卷之十四・盡心下・「孟子曰，由堯・舜至於湯，五百有餘歳。若禹・皐陶，則見而知之，若湯，則聞而知之」朱注の「尹氏曰，知，謂知其道也」条）。

①常期：曹丕（魏文）「典論論文」に「蓋文章經國之大業，不朽之盛事，年壽有時而盡，榮樂止乎其身，二者必至之常期，未若文章之無窮」（『文選』卷五十二）。

②歴叙之，意有在矣：『論語集注』堯曰の「堯曰……」条の朱注に「楊子曰，……『論語』の終篇は」所以著明二十篇之大旨也。孟子於終篇，亦歴敘堯・舜・湯

✓（3）『四書大全』孟子大全・卷之十四・盡心下・「由湯至於文王，五百有餘歲。若伊尹・萊朱，則見而知之，若文王，則聞而知之」朱注の「趙氏曰，萊朱，湯賢臣。或曰，即仲虺也。爲湯左相」条に，元・胡炳文（字は仲虎，号は雲峰。安徽婺源の人）の『四書通』（孟子通・卷十四）の説を引いて次のようにいう。

〔雲峰胡氏曰〕舜「精一」（『書經』大禹謨）を言いて，而して後に「克<sup>レ</sup>く一なるに協う」（『書經』咸有一德）。伊尹 能く之を發す。堯「執中」（『書經』大禹謨）而して後に「〔湯が〕中を民に建つ」（『書經』仲虺之誥）。仲虺 能く之を發す。勇と曰い，曾と曰い，仁と曰い，禮と曰い，義と曰うは，『中庸』の三達徳・『孟子』の四端（『孟子』公孫丑上）なり。已に「仲虺誥」中に散見す。皆な只だ是れ萊朱は即ち仲虺なるを知るなり。○『論語』の末に武〔王〕を言ひ，文〔王〕を言わず，此は文〔王〕を言ひ，武〔王〕を言わず。文王の誥は道を明らかにするを以て言うなり。武王の烈は道を行なうを以て言うなり。『易』の作らるるや，其れ中古に於いてするや（『易』繫辭傳下），文王の功 大なり（『四書大全』孟子大全・卷之十四・盡心下・「由湯至於文王，五百有餘歲。若伊尹・萊朱，則見而知之，若文王，則聞而知之」朱注の「趙氏曰，萊朱，湯賢臣。或曰，即仲虺也。爲湯左相」条）。

✓（4）『四書大全』孟子大全・卷之十四・盡心下・「由文王至於孔子，五百有餘歲。若太公望・散宜生，則見而知之，若孔子，則聞而知之」朱注の「散，氏。宜生，名。文王賢臣也。子貢曰，文・武之道，未墜於地，在人。賢者識其大者，不賢者知識其小者。莫不有文・武之道焉。夫子焉不學。此所謂聞而知之也」条に，元・胡炳文（字は仲虎，号は雲峰。安徽婺源の人）の『四書通』（孟子通・卷十四）の説を引いて次のようにいう。

〔散宜生 經傳に於いて多く見えず。亦た以て文王の道を見て之を知ると爲す者は，何ぞや。（『四書通』によって補う）〕敬勝怠（敬 怠に勝つ）・義勝欲（義 欲に勝つ）（『大戴禮』武王踐阼）の類は，太公 孰發の書に非ず①。「茲の彝教を施（みちび）く」（『書經』君奭）は，則ち彝倫の教なり。散宜生 蓋し助くること有らん，と（『四書大全』孟子大全・卷之十四・盡心下・「由文王至於孔子，五百有餘歲。若太公望・散宜生，則見而知之，若孔子，則聞而知之」朱注の「散，氏。宜生，名。文王賢臣也。子貢曰，文・武之道，未墜於地，在人。賢者識其大者，不賢者知識其小者。莫不有文・武之道焉。夫子焉不學。此所謂聞而知之也」条）。

①『四書或問』大學傳二章・「盤之有銘，何也」章に「……其後周之武王，踐阼之初，受師尚父丹書之戒，曰敬勝怠者吉，怠勝敬者滅。義勝欲者從，欲勝義者凶……」。また，『朱子語類』卷十七・大學四或問上に「問，丹書曰，敬勝怠者吉，怠勝敬者滅。義勝欲者從，欲勝義者凶。「從」字意如何。曰，從，順也。敬便堅起，怠便放倒。以理從事，是義，不以理從事，便是欲。這處敬與義，是簡體・用，亦猶坤卦說敬・義。寓」。

[王]・文[王]・孔子相承之次，皆此意也。

③然其生也不數：韓愈「對禹問」に「天之生大聖也不數（天の大聖を生ずるや數し<sup>しば</sup>ばせず）」。

自堯舜以至於湯，以其年計之，則五百有餘也，當是時，見而知其道者，  
禹得之於執中之命，

皋陶得之爲典・禮之謨，

若湯之生也，則聞其道而知之焉，觀於上帝降衷之言，則斯道之統在於湯矣，

①見而知其道者：題目に「若禹・皋陶，則見而知之」。

②執中之命：『書經』大禹謨に「人心惟危，道心惟微，惟精惟一，允執厥中」。

③皋陶得之爲典・禮之謨：『書經』皋陶謨に「天有典を叙す。我が五典<sup>なだ</sup>を勅し，五つながら倬<sup>あつ</sup>うせよ。天有禮を秩す。我が五禮<sup>もち</sup>を自<sup>つね</sup>いて庸あれ」。また，注2参照。

④若湯之生也，則聞其道而知之焉：題目に「若湯，則聞而知之」。

⑤上帝降衷之言：『書經』湯誥に「惟れ皇なる上帝，衷を下民に降す」。また，注2参照。

自湯至於文王，以其年計之，亦五百有餘也，當是時，見而知其道者，

伊尹得之而爲一德之輔，

萊朱<sup>③</sup>得之而爲建中之誥<sup>④</sup>，

若文王之生也，則聞其道而知之焉，觀於緝熙敬止之詩<sup>⑥</sup>，則斯道之統在於文王矣，

①見而知其道者：題目に「若伊尹・萊朱，則見而知之」。

②一德之輔：『書經』咸有一德に「伊尹作咸有一德」。

③萊朱：題目<sup>①</sup>の朱注に「趙氏曰，萊朱，湯賢臣。或曰，即仲虺也。爲湯左相」。

④爲建中之誥：『書經』仲虺之誥に「湯歸自夏至于大坰。仲虺作誥」とあり，その誥の中で「中を民に建つ」という。また，注3参照。

⑤若文王之生也，則聞其道而知之焉：題目に「若文王，則聞而知之」。

⑥緝熙敬止之詩：『詩經』大雅・文王。

自文王至於孔子，亦五百餘年，猶湯之於堯舜，文王之於湯也，當是時，見而知其道者，

得之爲丹書之戒<sup>③</sup>，則有若太公望焉，

得之爲彝敎之勉<sup>④</sup>，則有若散宜生焉，

若孔子之生也，則聞其道而知之，賢者識其大，不賢者識其小<sup>⑤</sup>，無所不學，

即文王之道也、斯道之統、不又在於孔子乎、

①自文王至於孔子、亦五百餘年：題目に「由文王至於孔子、五百有餘歲」。

②見而知其道者：題目に「若太公望・散宜生、則見而知之」。

③丹書之戒：『四書或問』大學傳二章・「盤之有銘、何也」章に「……其後周之武王、踐阼之初、受師尚父丹書之戒……」。また、注4参照。

④彝教之施：『書經』君奭に「無能往來、茲迪彝教」。また、注4参照。

⑤若孔子之生也、則聞其道而知之：題目に「若孔子、則聞而知之」。

⑥賢者識其大、不賢者識其小：『論語』子張に「衛公孫朝、問於子貢曰、仲尼焉學。子貢曰、文武之道、未墜於地、在人、賢者識其大者、不賢者識其小者、莫不有文武之道焉、夫子焉不學、而亦可常師之有」。また、題目<sup>③</sup>参照。

吁、世雖有先後也、而道無先後之殊、傳雖有遠近也、而道無遠近之異、然則斯道之在天下、曷嘗一日而無哉（『欽定化治四書文』下孟・二十五葉・「由堯舜至於湯 三節」条）。

明・張居正の『四書直解』は、この箇所を次のように理解している。最初の一節は、次のように言う。

這の一章は是れ道統の傳を敘し、自ら繼往開來の意を寓す。這の一節は是れ首に堯・舜の道は禹・皋陶を得て以て其の傳に接するを言う。是に由りて五百餘歲より以て大●●●（三字不明）數言は重生せず。常數・定期有るの意なり。「見知」は、是れ親から其の傳を領す<sup>いみ</sup>の意思なり。「聞知」は、是れ後に傳聞し、其の道を得る<sup>い</sup>の意なり。孟子 説う聖道は必ず人を待ち、而して後に傳わる。「聞知」は「見知」に由り、而して後に得らる。是の故に「精一」・「執中」は、堯・舜に發し、道統の傳は此に始まる。堯・舜由り湯に至るまで、其の年を以て計算すれば、則ち五百有餘歲なり。當時の禹・皋陶の若きは、則ち見て其の道を知る者なり。都兪<sup>とゆ</sup>吁咈<sup>くふつ</sup>（『書經』堯典に「<sup>あ</sup>吁、<sup>ふつ</sup>咈なるかな」。益稷に「禹 曰く、<sup>あ</sup>都、<sup>なんじ</sup>帝 乃の在位を愼しめ。帝 曰く、<sup>しか</sup>兪り」とあり、君臣の間の議論がむつまじいことを表わす）の間に殆ど親しく那の執中の旨を領す。成湯の生まるるが若きは、則ち其の道を開きて之を知る。躬から堯・舜に逢うを得ずと雖も、



猶お幸いに禹・皐陶の統に接するを得。「精一」とは、得て敬徳の蘊を爲すなり。「執中」とは、得て建中立極を爲すなり。此れ湯の統を堯・舜に得る所以なり（『重刻張閣老經筵四書直解』下孟・卷二十七・盡心章句下「孟子曰、由堯・舜至於湯、五百有餘歲。若禹・皐陶、則見而知之、若湯、則聞而知之」条・二十四葉～二十五葉）。

次の節は、次のように言う。

這一節は是れ成湯の道 伊 [尹]・萊 [朱] に得て以て其の傳を翼すを言う。伊尹・萊朱は皆な湯の臣なり。孟子 [以下のように] 説う。夫れ堯・舜の統は五百年を越えて、湯 之を承く。統を湯の後に得る者は、文王なり。商の成湯より周の文王に至るに年を以て其の數を計るや、五百餘歲有り。當時の伊尹・萊朱の若きは、則ち見て其の道を知る者なり。明臣相い遇いて親しく一つの中の道統を受ける者なり。文王の若きは、後に生まれれば則ち其の道を聞きて知る者なり。親しく成湯に受くるを得ずと雖も、猶お幸いに伊 [尹]・萊 [朱] に私淑するを得るがごとし。緝熙の敬（『詩經』大雅・文王「穆穆文王、於緝熙敬止」）、聖敬の躋（『詩經』商頌・長發「湯降不遲、聖敬日躋」）に愧じる無し、聖道の誠 制心の學を忝（はずかし）める無し。此れ文王の統を湯に得る所以なり（『重刻張閣老經筵四書直解』下孟・卷二十七・盡心章句下「由湯至於文王、五百有餘歲。若伊尹・萊朱、則見而知之、若文王、則聞而知之」条・十九葉）。

次の節は、次のように言う。

這一節は是れ文王の道は太公望・散宜生を得て以て其の傳を翼すを言う。孟子 [以下のように] 説う。湯の統は五百歳を越えて、文 [王] 之を承く。統を文王の後に得る者は、孔子なり。周の文 [王] 由り春秋の孔子に及ぶは、年を以て其の數を計るや、五百餘歲有り。當時の太公望・散宜生の若きは、則ち見て其の道を知る者なり。君臣 交ごも會して殆ど一つの中の傳に親炙するなり。孔子の若きは後にして生まるる有れば、則ち其の道を聞きて知る者なり。親しく文王に受くるを得ずと雖も、猶お幸い

に傳を呂（太公望）・散〔宜生〕に受くるがごとし。賢者は、其の大を識り、以て其の耿光の烈に<sup>まみ</sup>觀ゆ（『書經』立政に「以觀文王之耿光，以揚武王之大烈」）。「不賢者は、其の小を識り」（『論語』子張），以て其の「敬止」（『詩經』大雅・文王）の眞を承く。此れ孔子の統を文王に得る所以なり（『重刻張閣老經筵四書直解』下孟・卷二十七・盡心章句下「由文王至於孔子，五百有餘歲。若太公望・散宜生，則見而知之，若孔子，則聞而知之」条・十九葉）。

また、清の康熙帝御定『日講四書解義』（康熙十六年〔一六七七〕刊）は、題目の部分をおのように解釈する。

此の一章は是れ孟子 道統を以て自任するを書するなり。孟子 曰う、聖聖の相傳は、大約 其の候を五百年とするなり。「聞きて之を知る」者有りて以て其の統を繼げば、則ち必ず「見て之を知る」者有りて以て其の先を開く。堯・舜より湯に至るまで、蓋し五百有餘歲なり。湯 何を以て統を堯・舜に得んや。〔それは〕禹・皐陶の諸人有りて、親しく堯・舜を見て、其の精一・執中の旨を知るに由り、是<sup>こゝ</sup>を以て湯 「聞きて之を知る」を得るなり。湯より文王に至るまで、亦た五百有餘歲なり。文王 何を以て統を湯に得んや。〔それは〕伊尹・萊朱の諸人有りて、親しく湯を見て、其の「聖敬日躋（聖敬日<sup>ひ</sup>に<sup>のび</sup>躋る）」（『詩經』商頌・長發）の學を知るに由り、こゝ是を以て文王 「聞きて之を知る」を得るなり。文王より孔子に至るまで、又た五百有餘歲なり。孔子 何を以て統を文王に得んや。〔それは〕太公望・散宜生の諸人有りて、親しく文王を見て、其の「緝熙敬止（緝熙にして敬止す）」（『詩經』大雅・文王）の徳を知るに由り、是<sup>こゝ</sup>を以て孔子 「聞きて之を知る」を得るなり。此れに由りて之を觀れば、聖道の統は必ず見て知る者の之を前に傳えらるる有り、而して後に聞きて知る者の考え以て後に紹ぐ所有るを得。古より然りと爲す。誣<sup>し</sup>うる可からざるなり。孔子より來りて、今日に至るに僅かに百有餘歲なり。聖人の世を去ること、此の若く其れ未だ遠からざるなり。且つ鄒より魯に至るは、封

域 相い接す。聖人の居に近きこと、又た此の若く其れ甚だしきなり。此れ其の間 宜しく人有るべく、「見て之を知る」は、禹・皐陶の諸人の如き者なり。而して後に「聞きて之を知る」無きを患わざるは、湯・文の諸人の如き者なり。然して寥寥たる百年の間、其の人<sup>ひと</sup>有る無けんや。則ち亦た其の人<sup>ひと</sup>有る無けんや。按ずるに孟子の此の言 敢て明らかに道統を以て自任せずと雖も、自任の意は切なり。道とは何ぞや。孟子の七篇の首に仁義と言う。此れ道の大端なり。後世、仁義を上<sup>うへ</sup>に躬行する者有り、即ち堯・舜・文の君なり。而して仁義を下<sup>した</sup>に講明する者有り、即ち孔・孟の徒なり。道は天壤<sup>てんじやう</sup>に在り、代ごも人に傳うる有り。後起の責有る者は、烏くんぞ以て自ら<sup>より</sup>諉<sup>うたが</sup>ねる可けんや（『日講四書解義』卷之二十六・孟子下之八・五十葉～五十一葉・「孟子曰、由堯・舜至於湯、五百有餘歳。若禹・皐陶、則見而知之、若湯、則聞而知之。由湯至於文王、五百有餘歳。若伊尹・萊朱、則見而知之、若文王、則聞而知之。由文王至於孔子、五百有餘歳。若太公望・散宜生、則見而知之、若孔子、則聞而知之。由孔子而來、至於今、百有餘歳。去聖人之世、若此其未遠也。近聖人之居、若此其甚也。然而無有乎爾、則亦無有乎爾」条）。

(つづく)

[訂正] 前々稿「明代初期の八股文について(6)」(『経済理論』第341号)の93頁の見出しを次のように訂正してください。

第341号93頁 (六)正統年間

王恕

—————→

④王恕